

令和 8 年度

住民対話「みらいトーク！」

実施結果 最終整理

第 6 次総合振興計画の策定に向けて

15	79	8	1
会場	延べ参加者	検討すべき方向	判断基準

本資料の位置付け

本資料は、第 6 次北塩原村総合振興計画の策定に向けて村内 15 会場で実施した住民対話「みらいトーク！」について、各会場で住民から出された話、複数地区を横断して確認できた傾向、それらを踏まえた計画策定上の事務局整理を区分してまとめた最終資料である。

各会場の参加者数や発言量、参加者の属性は異なるため、記載内容を各地区全体の総意とするものではない。発言の多さを重要度の高さと同一視せず、それぞれの地区の背景、生活圏、産業、自然環境等を踏まえて読む必要がある。

1 実施概要

第 6 次総合振興計画の策定に向け、村内 15 会場で住民対話「みらいトーク！」を実施し、延べ 79 名から意見を伺った。

各会場では、ビジョンマップと付箋を活用し、「残したいもの」「大切にしたいもの」「心配なこと」「今後あったらよいもの」を中心に意見交換を行った。

会場・地区	実施日	参加者
北山	7 月 6 日	5 名

会場・地区	実施日	参加者
谷地	7月7日	5名
下吉	7月8日	5名
松陽台	7月9日	5名
関屋・樟	7月13日	4名
大塩	7月16日	3名
大久保	7月17日	6名
桧原	7月22日	2名
金山	7月23日	6名
早稲沢	7月24日	9名
長峯	7月27日	6名
剣ヶ峯	7月28日	3名
曾原・狐鷹森	7月29日	6名
蛇平・秋元・小野川	7月30日	5名
上川前・下川前	8月21日	9名
計		79名

2 住民から出された話を横断して確認できたこと

- 人口減少や高齢化が、行政区役員、消防団、祭り、農業、宿泊業、共同作業等の担い手不足として、すでに地域運営へ影響している。
- 除雪、草刈り、水路管理、見守り、買い物送迎等が、一部の住民の責任感や善意に支えられており、継続に限界がある。
- 空き家、空き店舗、未利用施設、所有者不明土地等は、状態が悪化する前から、所有者の意向、管理、活用、解体等を考える必要がある。
- 自然、景観、農業、温泉、歴史、文化、少人数教育、住民同士の顔の見える関係など、各地区に大切にしたい価値が残っている。

- 地域に何もないのではなく、すでにある人、場所、施設、商品、活動が、使える状態になっていない、互いにつながっていない、十分に伝わっていないという課題がある。
- 人口減少や生活様式の変化により、以前は自然に生まれていた住民同士の交流や、世代を越えて顔を合わせる機会が少なくなっている。住民同士、地区同士、村と村外の人とのつながりを意識して育てる必要がある。
- 各地区には、すでに地域を良くしようと活動している人や、「何かやってみたい」と考えている人がいる。こうした行動を個人の熱意だけに任せず、実行し、続けられるよう支える必要がある。
- 過去にも意見を伝えたが、その後の検討状況や結果が分からなかったとの指摘が複数地区からあり、対話の継続、対話後の説明と結果の見える化が求められている。

3 【事務局整理】計画策定に当たっての重要な前提

人口減少の抑制や移住促進には、引き続き取り組む。一方で、地域を支える人材、財源、時間等が限られる中、現在の事業、施設、組織、行事等を、すべて同じ規模・同じ方法で続けることはできない。

すべてを維持できないことを、単なる縮小や撤退の理由にはしない。本当に必要な機能を残すため、続け方を選び、持続可能な形へ組み直すという考え方が必要である。

- 今後も残すもの
- 方法や規模を変えて続けるもの
- 他の地区、団体、事業等と連携・統合するもの
- 役割や必要性を確認し、見直すもの
- 新たに重点を置くもの

何を残し、何を変え、何をやめるかは、行政だけで決めるのではなく、住民や関係者との対話を通じて判断する必要がある。

4 8つの方向を支える生活の土台

村で暮らし続けるための基盤

除雪、移動、買い物、医療、水道、防災、道路・水路、鳥獣被害対策等は、住民が村で安心して暮らし続けるための基盤である。これらは地域振興や移住促進を進めるための前提でもあり、人口が少ない、維持に費用がかかるという理由だけで、その必要性を判断することはできない。

一方で、人口、担い手、財源が減少する中、すべてをこれまでと同じ方法、同じ水準で維持し続けることも難しくなる。大切なものを守り続けるためにこそ、やめること、減らすこと、まとめること、方法を変えることも選択肢として考える必要がある。

何を守り、何を変え、何をやめるのかを行政だけで決めるのではなく、住民と行政が、地域の現状、将来の見通し、費用、担い手等の情報を普段から共有しながら、ともに考え、選んでいくことが重要である。人口減少が進み、選択肢が少なくなってから初めて難しい判断を迫られるのではなく、自分たちの地域の未来を、自分たちで考え、選んでいける状態をつくる必要がある。

5 【事務局整理】次期総合振興計画で検討すべき8つの方向

① すべてを続けるのではなく、必要な機能を残す

行政区、消防団、地域団体、祭り、共同作業等を、従来と同じ形で続けること自体を目的にはしない。人が集まる、世代を越えて交流する、災害時に助け合う、地域への愛着を育てるなど、残すべき機能を確認し、現在の人口規模や働き方に合う形へ組み直す。必要な機能を残すためには、従来の形式や慣例の一部をやめる判断も必要であり、その判断は対話を通じて行う。

② 一律にせず、地域の違いと強みを生かし、役割を補い合う

北山、大塩、桧原、裏磐梯等では、歴史、地形、生活圏、産業、自然環境、人口構成、地域に求めるものが異なる。すべての地区へ同じ方法を当てはめず、それぞれの実情と強みに応じた取組を考える。一方で地域を別々に扱わず、農業、観光、食、歴史、自然、生活機能等の役割を補い合い、その効果が村全体へ循環する関係をつくる。「一律にしない。しかし、分断もしない」という考え方である。

③ 観光だけで考えず、住民と来村者の双方に良い形を考える

観光客数や来訪者の利便性だけを基準とせず、交通、店舗、イベント、景観、自然利用等を、住民の暮らしをより良くしながら、来村者にも北塩原村の魅力を感じてもらえる、双方にとって「ちょうどよい形」にする。住民の楽しさ、誇り、利便性の向上を、来村者の満足や再訪へつなげる。また、すべてを観光利用や消費へ結び付けず、静かな環境や景観など、手を加え過ぎずに守ること自体が価値となるものも大切にする。

④ 万人に選ばれることだけを目指さず、この村を選ぶ人を支える

北塩原村は雪が多く、車がなければ暮らしにくい地域もあり、買い物や仕事等、都市部と比べて不便な面もある。すべての人にとって便利で、万人に選ばれる村を目指すことには限界がある。一方で、そうした不便さも含めた自然、静かな暮らし、人との距離感、地域の文化等に価値を感じ、「ここで暮らしたい」「ここで仕事をしたい」「この村に関わり続けたい」と思ってくれる人がいる。いわば「万に一人」であっても、この村を好きになり、ここを選んでくれた人を取りこぼさず、しっかり応援することが重要である。情報発信だけで終わらず、住まい、仕事・起業、雪国での暮らしの情報、地域との関係づくり等、「興味を持つ」から「実際に暮らし、活動が続ける」までの壁を一つずつ取り除く仕組みを整える。

⑤ 村の環境を生かした「なりわい」を育てる

自然、雪、農業、食、歴史、文化、景観、宿泊、観光客との接点等を生かした、小さな商い、起業、事業承継、複数の仕事を組み合わせた働き方を支える。一つの飲食店や小さな商いも、来村者の滞在・消費だけでなく、村で生きたい人の仕事となり、住民の食事、買い物、交流の選択肢になる。事業を一つの分野だけで評価せず、暮らし、観光、移住、交流、福祉、教育等への複数の効果を踏まえて考える。

⑥ 村内外の関係を結び直し、関わり続けられる受け皿をつくる

人口が少なくなる中では、地区内の住民同士のつながりだけで地域を維持することは難しくなる。地域を越えたつながりや、帰省者、移住者、二地域居住者、リピーター、観光客、地域の活動を応援する人等との関係を結び直す。ただし、イベントを開催することや、人を集めること自体を目的にはしない。イベントや情報発信は、人と人、人と地域が出会う「きっかけ」である。その後、交流の場、地域活動への参加、繰り返し滞在できる場所、仕事やボランティア、住まい、相談先等、関心を持った人が次の一歩へ進み、関係を続けられる「受け皿」もセットで整える。「知る→出会う→関わる→また関わる」という関係を育てる。

⑦ 地域で動く人・動きたい人を支える

各地区には、農業、観光、宿泊、飲食、文化、自然体験、地域活動等で、すでに地域を良くしようと動いている人がいる。また、「こんなことをやってみたい」と考えている人もいる。人口が減少する中では、こうした一人ひとりの行動が地域にとってこれまで以上に大きな意味を持つ。個人の熱意だけに任せず、人材、仲間、場所、空き家・空き施設、資金、機械、専門家、販路、情報発信等へつなぎ、「やってみたい」という段階から、小さく試し、改善しながら実行へ進めるよう支える。頑張っている人を孤立させず、頑張りたい人の最初の一步を止めない仕組みをつくる。

⑧ 住民と行政が役割を持ち寄り、対話を続ける

地域の課題を住民だけへ任せるとしても、行政がすべてを担うのでもなく、住民、地域団体、事業者、行政、関係機関が、それぞれにできることを持ち寄る。行政は補助制度を案内するだけでなく、人材、機械、資材、情報、販路、専門機関、土地所有者等へつなぎ、実際の行動につながる支援を行う。人口減少が進む中では、「何を残すか」「何を変えるか」「何をやめるか」といった簡単ではない判断も増える。普段から行政と住民が地域の現状や制度、費用、担い手等の情報を共有し、答えが決まっていない段階からともに考え、ともに選ぶ姿勢が必要である。意見を聴いて終わらず、何を計画へ反映するのか、何を個別計画や事業へ引き継ぐのか、難しい場合には何が課題なのかを住民へ返し、対話と実行を続ける。

6 計画を考える際の判断基準

人口、観光客数、施設数等の数値は、今後も必要な指標である。一方で、数値を増やすこと自体を最終的な目的とするのではなく、次の暮らしの実感を、村づくりを考える際の重要な判断基準とする。

現在と未来の村民が、「ここに住んでいてよかった」と感じられるか。

7 総合振興計画と具体的な提案の扱い

第6次総合振興計画には、以上の8つの方向や判断基準を、村づくりの基本的な方向として整理し、反映を検討する。

一方、各地区から出された具体的な施策・事業の提案を、そのまま総合振興計画へ掲載するものではない。具体的な提案は、各分野の個別計画、実施計画、既存事業の見直し、新規事業等を検討する際の参考とする。

- 移動販売、買い物支援、地域交通
- 除雪機械、草刈り、水路管理、鳥獣被害対策
- 空き家、空き店舗、既存施設の活用
- 景観整備、道路、散策路、駐車場所
- 地域行事、交流拠点、イベント
- 農業、観光、宿泊業、飲食業等の具体的な事業
- 賃貸住宅、お試し住宅、移住支援
- 地域外の人滞滞在・地域活動への参加
- 地域で活動する人、新たに挑戦する人への伴走支援

8 各会場で出た主な話

以下は、各会場の実施報告書に記載された主な課題、残したい価値、特徴的な意見を簡潔に整理したものである。

北山（7月6日／5名）

- 行政区、消防団、祭り、見守り等の担い手不足への不安。
- 商店、食堂、居酒屋等、買い物・食事と交流を支える小さな拠点への要望。共同食堂、日替わり店主、地元農産物を使う軽食等の案。
- 田園風景、ホテル、災害の少なさ、治安、少人数教育を地域の価値として確認。空き家・空き店舗を起業や移住の受け皿へつなぐ必要。

谷地（7月7日／5名）

- 世帯継承、雪片付け、農地・水路・地域組織の担い手不足への不安。地区外の耕作者を含む役割分担の必要性。
- 空き家になる前から、所有者の意向、管理、活用、解体等を整理する必要。
- 川辺、田園風景、静かな暮らしを残し、負担の少ない夏祭りやビアガーデン、農業体験等を、帰省者や子どもとつながりに生かす。

下吉（7月8日／5名）

- 後継者不足、草刈り・雪片付け・道路や河川周辺の管理、空き家・荒れ地等を住民だけで担うことへの限界。
- 大規模な行事ではなく、飲食を伴う小さな催しや、若い世代・女性も参加しやすい交流の場を求める声。
- 川、ホテル等を大規模観光化せず、暮らしの中で小さく生かす視点。裏磐梯方面との施策の違い、過去の構想の説明不足への厳しい意見。

松陽台（7月9日／5名）

- 若い世帯の確保、村営住宅の家賃・入居制度、宅地・未利用地の柔軟な活用。
- 子どもの遊び場、カフェや休憩場所等の小さな交流拠点、歩道・照明・遊歩道・役場庁舎を明るく利用しやすくする要望。
- 森林・竹林、害虫、野生動物、移動販売への対応。住宅、教育、自然、歩きやすさを組み合わせた情報発信と、計画変更時の説明。

関屋・樟（7月13日／4名）

- 行政区役員、祭り、農業組織等を、現在の人数でも無理なく続けられる形へ見直す必要。
- 農業の担い手と安定した仕事の確保。地域の仕事を若い世代へ見える形で伝える必要。
- 静かな雪景色、自然に囲まれた「ちょうどよい田舎」、山菜、川、釣り、職人の技術等を価値として確認。森林・熊対策、買い物、助け合い、情報共有、対話結果の見える化。

大塩（7月16日／3名）

- 人口減少と参加者の少なさを含め、若い世代・移住者の声をどう拾うかが課題。
- 温泉を観光だけでなく住民の交流・健康づくりに使うこと、川や自然に安全に触れる子どもの体験、山塩・山城・街道・神社・しめ縄等の継承。
- 移住前に共同作業や費用負担等を伝える仕組み、廃屋・所有者不明土地への対応。「できない理由」で終わらず、代替案を一緒に考える行政姿勢への要望。

大久保（7月17日／6名）

- 複数の役職が少数の住民へ集中。地区・団体の枠を越えた連携、統合、役職や作業の削減が必要。
- 自宅周辺の除雪、買い物・通院、獣害、森林・斜面・水路、過去の水害経験を生かした防災等、地域だけでは解決できない課題。

- 清水、クレソン、米、柏木城跡、アジサイロード等の資源と自治意識。小さな立ち寄り拠点や公衆トイレ等、目に見える改善を一つでも実現し、結果を返すことへの期待。

桧原（7月22日／2名）

- 若い人を増やすことだけに期待せず、今ある人と資源を生かして維持するという考え。除雪、草刈り、水路管理を実際に担う人の確保。
- 移動販売、送迎、宅配等の生活支援、スポーツフェスティバルや食事を伴う交流の場を残すこと。
- 湖、温泉、宿泊、食堂、釣り等を組み合わせ、住民の暮らしと地域内消費へつなぐ。桜並木・眺望、旧中学校等の既存施設、空き家・共有地を使える状態にし、行政が実行面で伴走する。

金山（7月23日／6名）

- 地域全体で子どもを見守る関係と、個性が受け入れられる少人数教育を地域の強みとして確認。
- 桧原湖、小谷山城跡、鉾山跡、旧街道、水没集落等をつなぎ、山塩ラーメンを起点に地区内の回遊、自然体験、滞在へつなぐ。
- 仕事・住居・起業支援、除雪、買い物、医療、鳥獣被害等の生活基盤も同時に整え、観光振興と住民生活を両立する。

早稲沢（7月24日／9名）

- 高原野菜を支える農家が急減し、10年後ではなく2～3年後を見据えた農地集約、法人化、共同経営等への強い危機感。
- 自立性の高い「強い個人プレイヤー」を尊重しつつ、生産、販売、配送、情報発信等を緩やかに役割分担する必要。
- 農業、宿泊、キャンプ、釣り、合宿、涼しい気候等を組み合わせ、通過客を滞在・消費・再訪へつなぐ。地域の不便さも価値と感じ、自ら仕事をつくる人への住居・起業・事業承継支援。

長峯（7月27日／6名）

- 祭り、行政区、草刈り等を、何のために続けるかから考え、役職削減、近隣集落との連携・統合等を検討する必要。
- 桧原湖・磐梯山の景観、道の駅、交流センター、キャンプ場、雪等を、住民と来村者の双方が楽しめる形で生かす。豪雪、交通、地区管理水道等の暮らしの課題も大きい。
- 地域の不便さを価値と感じ、飲食、文化、写真、宿泊等に取り組む個性的な人を地域資源として支える。地域間で強みと役割を補い合う村内経済循環、対話結果の継続的な共有。

剣ヶ峯（7月28日／3名）

- 人口や施設規模だけでなく、一人ひとりの心、穏やかな暮らし、地域への愛着を計画の判断基準にする考え。
- 北山・大塩方面と桧原・裏磐梯方面の違いを認め、観光と農業を分断せず役割を補い合う。顔を合わせ、すぐ言葉が出ない人を待つ対話の価値。
- 祭りや消防団を形式でなく機能から見直す。自然保全・安全・景観、湖沼の利用ルール、住民も参加できる観光、ファンづくり、小規模な商い、挑戦する人への伴走支援。

曾原・狐鷹森（7月29日／6名）

- 地域を諦めず、すでに活動している住民・事業者を把握し、つなぎ、支えること。湖沼や磐梯山、何もしないで静かに過ごせる時間そのものを価値として守る。
- 過去の景観計画を再確認し、すべてを整備するのではなく、守り利用する場所を選ぶ。五色沼から地区内・桧原湖一周への回遊、観光客を村全体の客として共有する。
- 北山・大塩の農産物と裏磐梯の宿泊・飲食、小規模事業者と大規模施設をつなぐ。サブ住民、地域独自の教育、歴史の物語化、情報の一元化、行政の伴走とテーマ別対話。

蛇平・秋元・小野川（7月30日／5名）

- 子ども、世帯、民宿等が大幅に減少。若い世代はいても、村外通勤や日程等により地域活動へつながっていない。外国人住民を含め、現在の暮らしに合う参加方法への見直し。
- 車を運転できない人の買い物・移動、観光客が素通りする構造、磐梯山の景観、グリーンフィールド蛇平等の既存施設、猿・熊、草刈り・除雪等を一体的に考える。
- 祭りを、人が集まり関係を確認する機能へつなぎ直す。地域の食文化、参詣道、小野川不動滝等を記録し、子どもや来村者へ伝える。すべてを行政が行えないため、役割分担と実行可能な方法を対話で考える。

上川前・下川前（8月21日／9名）

- 神楽や祭り等について、行事の形だけでなく、住民が集まり、世代を越えて関係をつくる役割をどう残すかを考える必要。移住者からも、人の親切さや地域の雰囲気が魅力として評価された。
- 「ふらっと事業」のように、子ども、若い親、高齢者等が気軽に集まれる場を評価。公民館・集会所等の既存施設、農産物、小さな催し等を組み合わせ、日常的な交流につなげる。

- 移住希望者が実際に利用できる賃貸住宅・お試し住宅の確保、空き家の早期活用、雪国での暮らしを含めた移住支援が必要。
- 道路、草刈り、除雪等の生活基盤について、地域と行政の役割を組み合わせることで維持すること、住民と行政が答えの決まっていない段階から情報を持ち寄り、一緒に考えることが重要。

15 地区での対話を、意見聴取で終わらず、計画・事業・次の対話へつなげる。